No. 85

昭和六十一年八月二十四日(日)

# 草も木も若しくは我を知りたるや

## ―水野家と春日部市備後―

越谷市郷土研究会理事
木原徹也

# 目次

一、日光街道の紀行文……1
結城使行……1
・千住宿
・草加宿
・蒲生村
・越ケ谷宿
・備後村
二、結城の領主……5
結城氏……5
廃城……6
水野氏……6
三、水野氏……7
水野家家譜……7
水野家関係図……22
江戸初期大名配置図……23
改易大名とその理由……24
あとがき……25
参考資料……26

# 一、日光街道の紀行文

## 結城使行

能登国西谷一万石を領していた、水野勝長は加増のうえ、元禄十六年(一七〇三)正月城主格に列せられ、結城家の故地、下総国結城に築城を命ぜられた。

城地検分のため、水野家の家老水野織部長福は、元禄十六年二月廿九日江戸藩邸を出立し、日光道中を通り、結城に入り城地を調査のうえ、同月二十日に帰着した。水野長福は、この時の往復路の紀行を『結城使行』と名付け記録に残している。

それによると、草加・越ケ谷等の日光街道の模様を次のように記している。

・千住宿

千住　此駅は千寿、千手とも書にや、江戸より弐里にて本駄賃七拾六銭　半駄賃五十銭といふなる。是はいやしき事のやうながら定法の趣なれば向来の覚にもと書つく。此後もみなしるし侍り。

ひろ〳〵と　奥州口の　霞かな

爰のにぎやかなるさま品川の宿にをとりまさりはあるべからずと見ゆる程なり。大はしを渡りてむかふを見れは鈴置与次右衛門、有馬平佐衛門かしこに、それがしを待て出むかいらる。首をめぐらして跡を見れば岡本六郎兵衛、後藤幸助追付来りて各手をつかねて君の御機嫌をうかゞわるゝまゝ今朝のおもむきをいひきかす。かたわらには江戸よりおくりし使の者のうづくまり侍るを招きよせて、それ〴〵に謝礼をのべて肩輿をすゝませ小橋を越して行〳〵て町はづれ右の方に八幡の社あり。左の畠の中成松林の中に氷川大明神ますといふ梅田村あり。

右に浅間の社あり。善福寺といふ寺見ゆ。返り筋に小板橋あり。一里山有。小板はしあり。かしこを見やれば既に、千住より二里八町にて本馬七くゝり、半駄はなもしといふなる草加の伝舎なり。宿の入口に左の方に権現の宮といふほこら又地蔵堂あり。因縁いかゞぞや。町並にいりてふさいじといふ寺あり。町すぢに小板橋二所あり。宿はずれの茶店にて午憩す。

・草加宿

花さかん　さうかとそきく　鳥の声

川あるによりて何川ぞと問せけるに、大河と申すといふに壱人は　あやし川といふ。又

老人あやせ川とも答ふ

鶯いかに　氷の隙を　あやし川

・蒲生村

此川をむかふへ越へて道のゆく手右も左も川水さしはさみて流悠々としていと興あり。かも村此所溝川の上に家を作りかけしはあぶなく見ゆ。爰の名物とて道に焼米をひさく。たゝ加茂村にてはあらず蒲生也といふおのこもあるに、いや〳〵加茂村と蒲生は一村の内にて名をわけしといふ。いづれが是なるぞ

道ぞ永き　日にやき米を　加茂蒲生

・越ケ谷宿

板はしをこへて一里山あり。小板橋を越て右にせいそういんとかいふ寺あり。河原そね(曽祢)を過てこしかへはあれよといふに、駕籠のまどよりのぞき見れば左に弁才天の宮尊く神〳〵し。越谷は誠に聞ふれし里の物ふりたるあわれ也。草加をへたつること一里二十八町ありて本馬五くゝり、山〳〵半駄三くゝり七夕(ゼキ)なりかし。

願花(ハナ)山越谷

町の中に荒川といふ川ありて青水漲りて名にしおいたるいきほひ猛にぞ見へける橋もいかつけに大橋といはん斗によこたふ。

荒川や　氷をなかす　風の勢

・備後村

小板橋あり。びんご(備後)村といふ家村あり。我故国の名にひとしければ草も木も、若は我をしりたるやとえりつくろひせきはらひする心になりしをいかに実も我七歳の昔より四拾有余の年迄すみなれ、殊に毎日忘れ奉らぬ父内蔵進(くらのしん)勝寿の命をわられし国なれば尚なつかしき心にぞなりにける。

香に匂へ　花そむかしを　備後村

# 二、結城の領主

## 結城氏

藤原秀郷の子孫、小山政光の四男、朝光が、源頼朝の挙兵に呼応し、その戦功により下総国結城を与えられ、以降結城氏を名乗り、朝光は、結城を根拠地として、居館を築き、鎌倉幕府の中でも重きをなしていた。

その後、結城氏は南北朝期には北朝方につき、宝町時代には関東屋形の一つとして勢力を振るった。しかし、永享の乱(一四三八)や、結城合戦等で敗れ、一時勢力は衰えたが、十六代政勝の代に、結城・下妻・下館・小山方面に勢力を拡大し、戦国大名へと成長した。

十七代晴朝は、永禄二年(一五五九)結城城主となり、小田原の北条氏康とともに、古河公方足利義氏をたすけ、上杉謙信と戦った。

天正十八年(一五九〇)には、秀吉の小田原攻めに加わり、のち、家康の次男秀康を養子に迎え、結城十万一千石を譲ったが、慶長五年(一六〇〇)秀康が越前に移封され、結城氏の支配は終わった。

## 廃城

結城秀康の越前への移封後は、結城城は、廃城とされ、久しく大名は封じられることなく、幕府の天領となり、関東郡代伊奈氏の支配が続いた。

## 水野氏

備後福山十万一千石を支配していた水野家は、五代勝岑が元禄十一年(一六九八)五月、数え年わずか二歳で死去してしまい、無嗣断絶となってしまった。

しかし幕府は、水野家の勲功を配慮して、分家筋に当たる水野勝直の長男勝長に家名相続を許し、一万石を与え、能登西谷藩をおこした。その後元禄十三年に結城へ移封となり、元禄十四年正月には三千石の加増があり、さらに元禄一六年正月に五千石の加増があり、合わせて一万八千石を領し結城に築城を命ぜられた。

しかし、この勝長も病気がちで、同年十二月、二十四歳の若さで没したため、実弟の勝政が遺領を継ぎ、以降明治の藩籍奉還まで水野家の支配が続いた。

# 三、水野氏

## 水野家家譜

- 忠政
  - 右衛門大夫　下野守
  - 近守　和泉守
  - 信元
  - 女子　三州形原松平家廣室
  - 信近
  - 忠守
    - 守重
      - 忠元　山形藩水野祖

女子　傳通院
享禄元年三州刈屋城ニ生ル、徳川大納言廣忠ニ嫁シ家康ヲ生ム
慶長七年八月二十九日卒　年七十五

女子　石川清兼室

女子　水野豊信室

忠近

忠勝

藤助

女子　中山勝時室

女子　大高城主水野忠守室

忠分　分長
　義忠
　　重仲　紀州新宮水野組

女子　水野義重室

女子　小笠原茂門室

信

女子　松平康信室

女子　有馬豊長室

忠重

明應二年生

永正六年父清忠ノ後ヲ継ギ尾州小河、大高、三州刈屋ノ三城十万石ヲ領ス

天文十二年七月十一日卒　年五十一

乾坤院ニ葬ル

元

四郎右衛門　下野守

信政

十郎三郎

女子　常滑城主水野守隆室

女子　木田城主荒尾善次室

女子　大高城主水野吉守室

女子　酒匂城主戸田重康室

女子　大崎七郎右衛門室

女子　水野重仲室
女子　鈴木重政室
女子　寺澤廣威室
女子　水野元敬室
女子　鈴水重信室
茂尾
利勝

天文十二年父忠政ノ後ヲ継グ
小河、大高、半田、西川、刈屋、西尾ノ六城ヲ有シ凡ソ二十四万石ヲ領ス
今川氏ト離レ織田信長ニ属シ東海道旗頭トナル
永樂錢ノ旗幕ノ紋ヲ賜フ、コレヨリ水野一家ノ軍器ハ永樂錢ヲ画ク徳川家
康ト共ニ大イニ振フ
天正三年十二月二十七日　卒
榜嶽寺ニ葬ル

忠重
藤十郎　和泉守

- 勝成　初代
  - 忠胤
    - 勝信　勝成ノ猶子
    - 女子　勝成ノ聟女
    - 女子　南條宣政室
    - 大貳
- 彌十郎　早世
- 忠清　出羽守水野（津藩）祖
- 女子　加藤清正室　清浄院
- 忠直　遠江守　佐渡守
  - 長助
  - 木之助
  - 忠氏
  - 忠成
  - 豐重
  - 女子　前田佐助室

治方
女子　目賀田守成室
某
忠儀
忠廣
女子　馬場貞清室
忠國
女子
女子
女子　成田孫之丞室
女子　藤掛三太夫室
宗右衛門
直清
女子　春日左衛門家次室
女子　島田加兵衛妻

女　子　木下民部利三室
女　子　南部光瀬寺妻

女　子　安部信勝室
女　子　森本左近室

天文十年生
徳川家康ニ属シ今川氏ヲ破ル（永禄十二年）
徳川家康三方原ニ於テ武田信玄ノ為メ苦戦トナルヤ　ヨク援ケ家康喜ビテ着セル甲冑ヲ脱ギ下サル（元亀三年十二月）
豊臣秀吉ノ没後石田三成悪計ヲ立ツヤ常ニ家康ヲ援ケ其ノ功頗ル多シ
慶長五年七月十九日旅舎ニ於テ石田三成ノ刺客ニ薨ル　年六十
楞嚴寺ニ葬ル
法名　瑞源院勇心賢忠
室都築京進平吉ノ女

勝成
初代　日向守　従四位下

勝俊
二代　初メ勝重

- 女子　實ハ加藤清正ノ女　養女
- 成言　紀伊守
- 成貞　出雲守
- 勝信　實ハ忠胤ノ子　養子
- 女子　實ハ忠胤ノ二女　養女
- 女子　早世
- 勝則
- 勝忠　若狭守
  - 勝岑
  - 勝直　備前守
- 女子

永禄七年八月十五日刈屋ニ生ル

十六歳ニテ初陣大功アリ（天正七年）

小西行長、加藤清正、黒田長政ニ歴任

家康ニ見エ下野小山ニ行営ス

父ノ遺領ヲ継ギ刈屋三万石ヲ領ス

大阪夏ノ陣ニ於テ一番乗リノ功名ヲ立テ敵首九十七ヲ得タ功ニ依リ大和六万石ヲ賜フ（慶長二年）

秀忠將タルニ及ビ備後國福山ニ築城十万石ヲ賜フ（元和五年八月）

備後州　深津村　二七カ村
　　沼隈村　四二カ村
　　安郡郡　三〇カ村
　　葦田郡　二八カ村
　　田怒郡　二四カ村
　　亀石郡　三七カ村
備中州　小田郡　二五カ村
　　後月郡　一カ村

寛永元年京都大徳寺内ニ瑞源院ヲ又慶安元年福山ニ賢忠寺ヲ健立シ以テ父ヲ弔フ

寛永三年一千石ヲ加封サル

島原ノ役ニ出陣一番旗ノ功名ヲ立ツ（寛永十五年）
翌年入道トナリ佛門ニ入ル宗休ト號ス
慶安四年三月十五日　卒　年八十八
法名　徳勝院参康宗休
室　三村紀伊守源家親女

勝俊

二代　美作守　従四位下

女　子　閑大納言藤原基福夫人
長　吉　早世　寛永二年五月廿六日卒
勝　貞　三代
女　子　萬壽　慶安五年正月十一日卒
女　子　寛永十一年十月十九日早世
女　子　早世
女　子　早世
多　門　早世

勝

亀之助　承應三年七月六日早世

小八郎　寛文元年三月十五日早世

勝　清　天和元年十月十七日卒

慶長三年七月廿五日備中成羽ニ生ル

父ニ従ヒ大阪ノ役及ビ島原ノ役ニ出陣シ功アリ

寛永十六年十一月福山十万一千石ヲ継グ

承應四年二月二十一日江戸櫻田邸ニテ卒　年五十八

福山妙政寺ニ葬ル

法名　信解院理圓日證

室　九鬼長門守藤原守隆ノ女

三代　備前守　日向守

貞

女子　勤修寺大納言源經慶夫人

女子　与曽

勝種　四代

寛永二年六月二十八日鞆ニ生ル

十四歳ニテ島原ノ役ニ出陣
承應四年四月廿九日福山城ヲ継領ス
寛文二年十月廿九日江戸溜池ニテ卒ス　年三十八　賢忠寺ニ葬ル
法名　源光院傑山宗英
室　酒井讃岐守源忠勝女　實ハ松平左近大夫源康政女

勝種

四代　民部

女子　八重　貞享三年三月七日卒　年三
女子　由多　貞享二年八月十五日卒　年二
數馬　元禄二年六月六日卒　年六
伊織　元禄二年正月廿日卒　年二
藤十郎　元禄三年七月廿日卒　年四
女子　力子　元禄七年八月朔日卒　年三
秋津虎千代　元禄十年三月十二日卒　年二
百助　元禄十年　早世
千菊　元禄十年七月卒　年一

「勝岑　五代

寛文元年五月九日福山城ニ生ル

元禄十年八月二十三日卒　年三十七　福山賢忠寺ニ葬ル

法名　萬輝院忠嶽全功

室　酒井雅樂頭忠清女

五代　内蔵丞　松之丞

元禄十年二月十日福山城ニ生ル

同年十月二十二日父ノ後ヲ継グ

元禄十一年五月五日参府ノ途病ヲ得、溜池邸ニテ卒　年二　常林寺ニ葬ル

法名　庸徳院天含了中

六代　隠岐守

延宝七年六月四日父勝直ノ江戸築地邸ニ生ル

水野勝直長男、水野勝岑死後嗣子ナク迎ヘラレテ家ヲ継グ

福山領地除封トナル

能登州一万石ヲ賜フ

勝岑

勝長

鹿島郡　二〇カ村
鳳氣至郡　二〇カ村
羽喰郡　二カ村
珠洲郡　一カ村

元禄十三年十月上總下總州ヲ以テ能登州ニ換フ　江戸神田橋ニ邸ヲ造リ移ル

上總州　武射郡　十一カ村
山邊郡　二カ村
下總州　結城郡　八カ村

元禄十四年正月三千石ヲ加賜

元禄十六年正月更ニ五千石ヲ加賜

結城ニ築城ヲ命ゼラル

下總州　結城郡十四カ村
常陸州　眞壁郡　七カ村
下野州　芳賀郡　一カ村

元禄十六年十二月二十二日　神田橋邸ニテ卒ス　年二十五　常林寺ニ葬ル

法名　仁德院智兼了勇

室　内田出羽守藤原正衆ノ女

勝政

七代　攝津守　日向守

女子　槌　大田原飛驒守扶清室

女子　結　早世　寛永六年十一月九日卒

女子　升　早世　享保四年四月六日卒

女子　市　植村土佐守源恒朝室

女子　道　生駒主殿藤原親賢室

女子　倫　松平河内守源直好室

女子　國　享保十四年四月十二日卒　考顕寺

女子　犬　早世　享保五年二月十四日卒

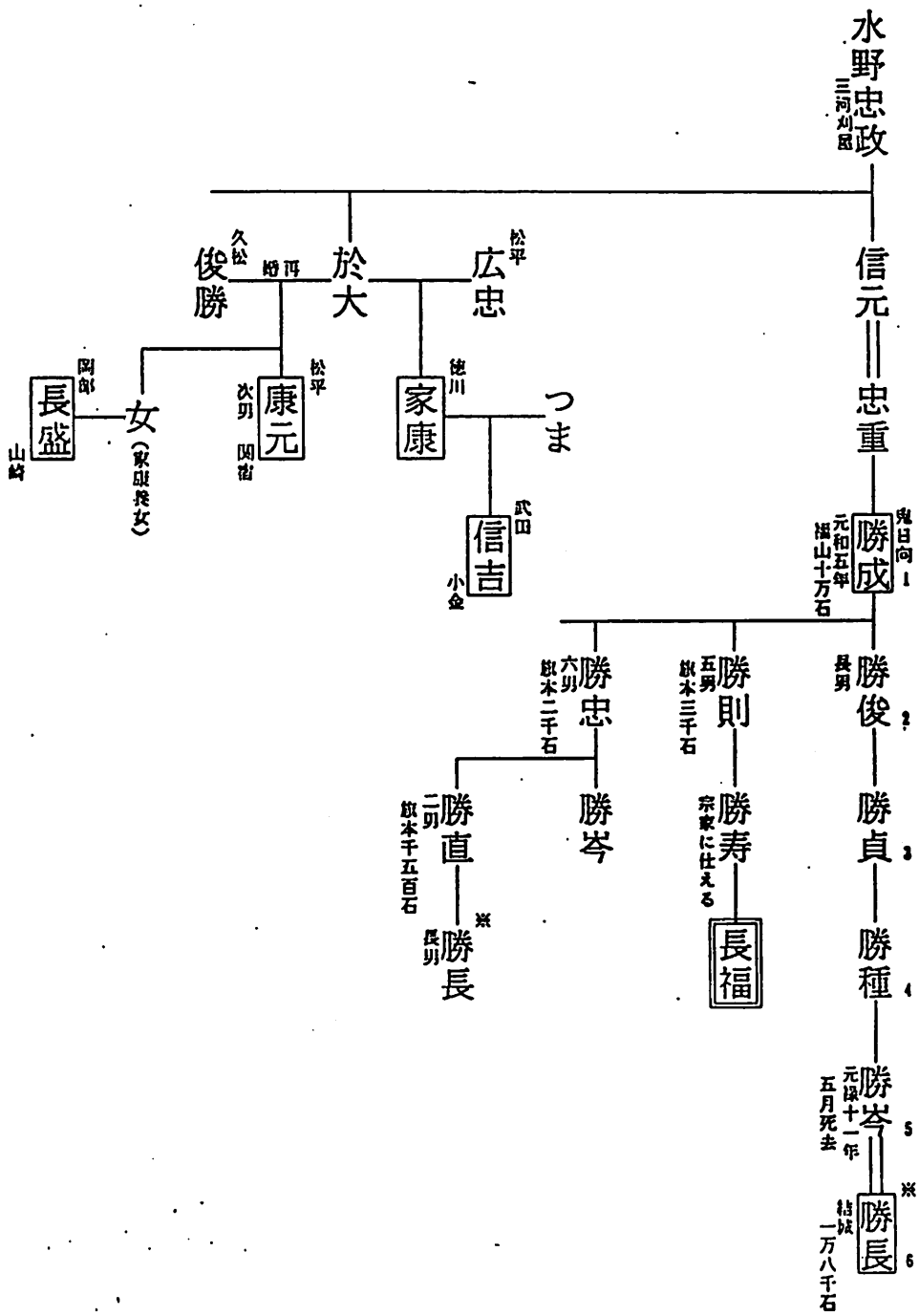
勝庸　八代

勝盛　元文四年八月四日卒　年二十

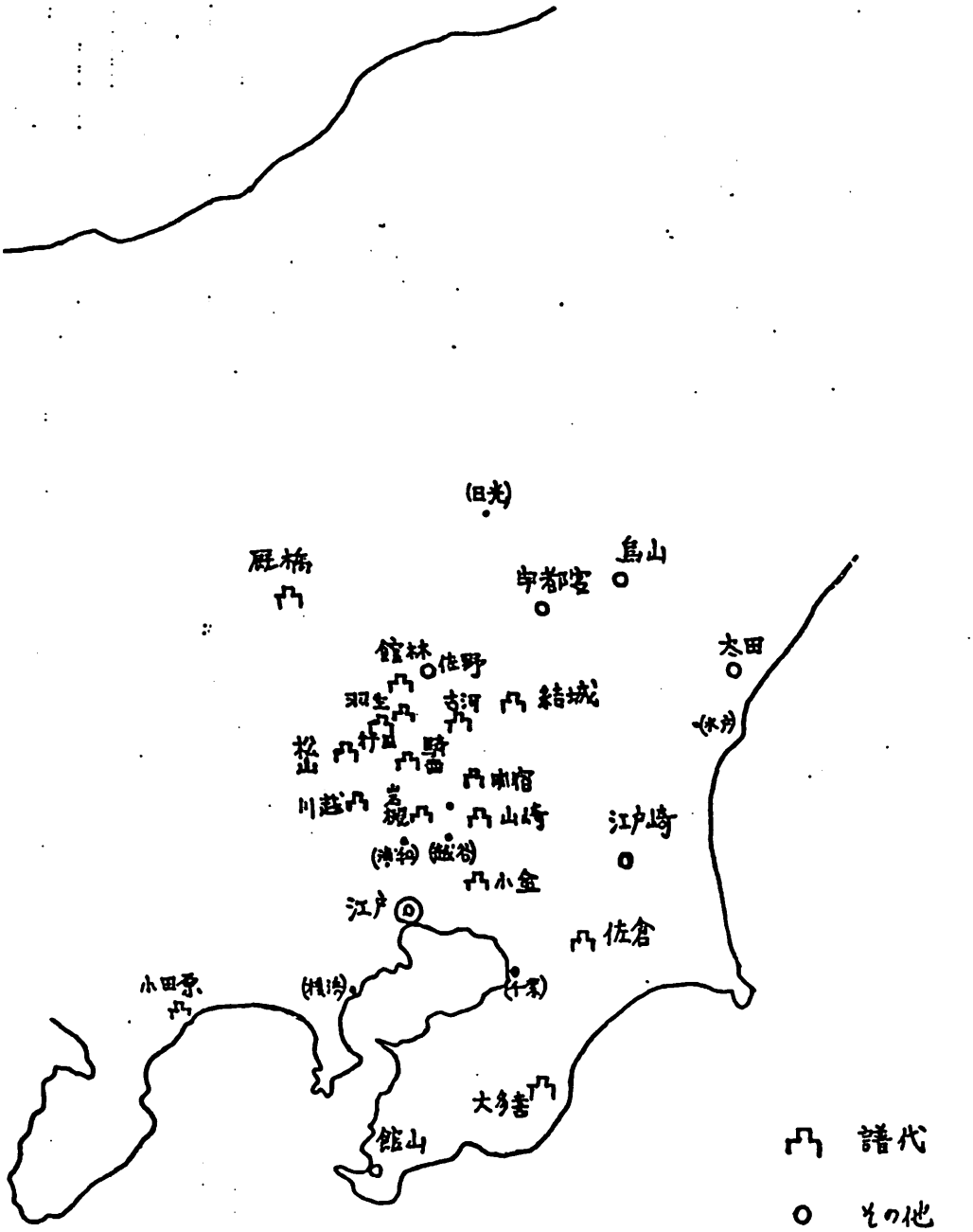
勝前　九代

勝珍　延享元年八月八日卒　年十七

## 水野家関係図


水野忠政
三河刈屋
信元
忠重
勝成
鬼日向 1
元和五年 福山十万石
勝俊
長男 2
勝貞 3
勝種 4
勝岑 5
元禄十一年 五月死去
勝長 6
結城 一万八千石
勝則
五男 旗本三千石
勝寿
宗家に仕える
長福
勝忠
六男 旗本二千石
勝岑
勝直
二男 旗本千五百石
勝長
長男
於大
広忠
松平
家康
徳川
つま
信吉
武田
小金
俊勝
久松
再婚
康元
松平
次男 関宿
女
(家康養女)
長盛
岡部
山崎

徳川氏大名配置図




(天正18年)

# 改易大名とその理由

| | | 慶長八年(1603)～元和元年(1615) | 元和二年(1616)～慶安四年(1651) | 慶安五年(1652)～享保元年(1716) | 享保二年(1717)～慶応三年(1867) | 小計 | 総計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 世嗣断絶 | 外様 | 4 | 32 | 23 | 0 | 59 | 104 |
| | 譜代 | 5 | 24 | 16 | 0 | 45 | |
| 幕法違反 | 外様 | 21 | 18 | 13 | 5 | 57 | 120 |
| | 譜代 | 8 | 9 | 26 | 20 | 63 | |
| 乱心・疾病 | 外様 | 1 | 4 | 4 | 0 | 9 | 22 |
| | 譜代 | 0 | 4 | 9 | 0 | 13 | |
| 小計 | 外様 | 26 | 54 | 40 | 5 | 125 | |
| | 譜代 | 13 | 37 | 51 | 20 | 121 | |
| 総計 | | 39 | 91 | 91 | 25 | | 246 |

※ 譜代には徳川一門を含む。

# あとがき

本稿は、他の調査のおり、たまたま目にした『結城使行』の一節、僅か四行の備後村（現春日部市）の記述に興味を持って、その背景を多少調べたものである。従って十分な調査とは言えず、また、郷土にそれ程強く結び付く内容とも言い難い。しかし、史料の僅かな記述であっても、注意深く読むならば、その背景の意外な大きさに驚かされ、郷土史研究の楽しみを同好の方々とわかち合えるのではと思いまとめた。

初めて訪れた土地で、自分の住む所やふるさとに在ると同じ地名に出会ったとき、誰しも懐かしく、また、どうして同じ地名が付いているのかに興味を持つに違いない。結城使行を読んで人々のこうした気持ちは、過去も未来も変わらないであろうことを知った。

ところで、現在、歴史を持った個性ある地名が、没個性化した地名にどんどん変えられているが、一考を要する必要があろう。

# 参考資料

『結城使行』　茨城県結城市役所
『寛政重修諸家譜』　続群書類従完成会
『房総諸藩録』　崙書房
『越谷市史通史一』　越谷市役所
『茨城県の歴史散歩』　山川出版社
「武家諸法度の大名統制原理」　廣田繁　新人物往来社
『日本史年表』　岩波書店

草も木も若しくは我を知りたるや

——水野家と春日部市備後——

昭和六十一年八月二十四日

発　行　越谷市郷土研究会

編　集　木　原　徹　也